第１章　高槻市の概要

１．自然的・地理的環境

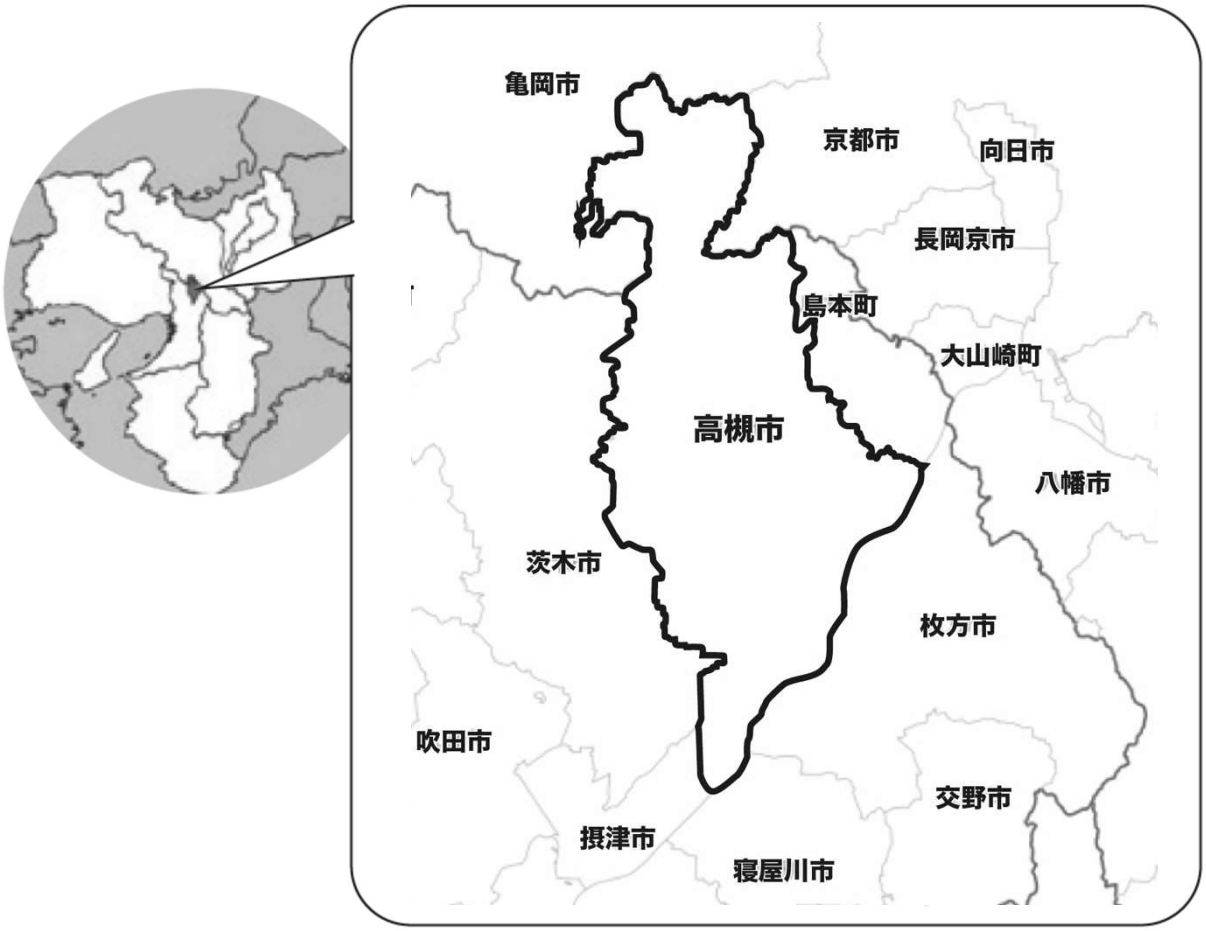
⑴位置・面積・地勢

本市は大阪府の北東部に位置し、淀川右岸の三島地域（高槻市・島本町・茨木市・摂津市・吹田市の４市１町）に含まれます。市域は東西に約 10.4 ㎞、南北に約 22.7 ㎞の広がりをもち、面積は 105.29 ㎢。大阪府内の市町村では４番目の広さです。北は京都府亀岡市、東は三島郡島本町、西は茨木市・摂津市、淀川を挟んで南は枚方市・寝屋川市にそれぞれ接しています。

北高南低の地勢にあり、最高峰はポンポン山の海抜 678.7ｍです。市域の北半は北摂山地から南へのびる丘陵部と台地であり、山地に発し南流して淀川に注ぐ桧尾川（ひおがわ）、芥川、女瀬川（にょぜがわ）が淀川低地に扇状地を形成し平野部を構成しています。

市街地は、市域中央を走る JR 及び阪急の鉄道沿線や国道 171 号などの沿道を中心に、丘陵部から平野部まで広い範囲に住宅地が展開しています。一方、北部の山間と南部の淀川沿岸には昔ながらの農村の風景が残されています。

＜本市の位置＞



出典：第６次高槻市総合計画掲載図、国土地理院地図に加筆

⑵地形的特徴

本市は、北は丹波高地に連なる北摂山地、南は大阪平野の北部を形成する淀川低地が広がり、中央部には高槻丘陵、奈佐原丘陵等の丘陵地が連なり、富田台地が南方へ突出しています。

本市の先人は、こうした地形の特徴を巧みに利用して生活してきたため、文化資源や文化財の成り立ちや背景に地形が深く関わっています。

【山　地】

北摂山地は市域の北半分を占め、大阪平野に臨む斜面は比較的急ですが、山頂部は山並みを形成し、標高 700m 以下の比較的低い山地ながら全体としては高原状になっています。また、京都市との市境には市内最高峰となる標高 678.7ｍのポンポン山があります。

【盆地・谷】

芥川や桧尾川は流域で北摂山地を侵食し、開折谷を形成するとともに、芥川上流の田能盆地や中流の原盆地、服部谷、桧尾川中流の成合谷等の谷底平野をともないます。山地に囲まれた集落は、数少ない農業生産や居住の場となっています。

【丘陵地】

高槻丘陵・奈佐原丘陵は、比較的起伏が小さく、古来居住や生業の場として利用されてきました。現在では鉄道駅への利便性の高さ等から、日吉台、安岡寺、南平台、上土室（かみはむろ）等の大規模な住宅地が形成されています。

【台　地】

市内唯一の台地である富田台地は、大部分が起伏の少ない標高 10～30ｍ程度の平坦面であり、潅漑によって緑の沃野―藍野―となりました。豊かな実りを連想する宮田や富田の地名の由来です。台地南端の富田では伏流水を仕込み水として酒造業が栄え、今も歴史的な町並の面影を残しています。

【低　地】

市域南部に広がる淀川低地は、大阪平野の北東部を構成する淀川の沖積地で、大部分が標高 10ｍ以下の低湿地で占められています。

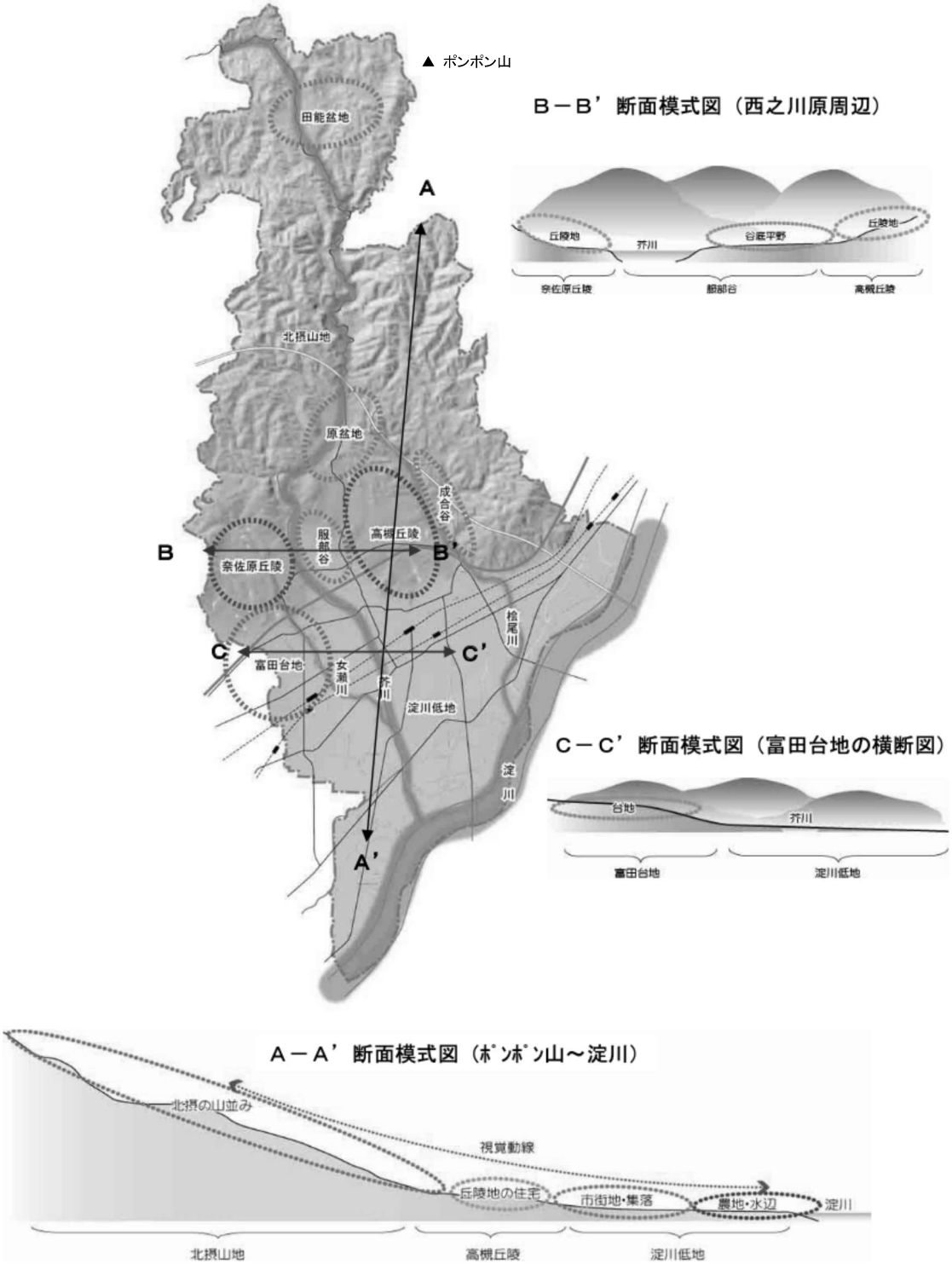
【河　川】

市域の南部は、日本有数の流域面積を誇る淀川が流れており、ここに北摂山地を源とする桧尾川・芥川・女瀬川の中小河川が平野部を南流して注いでいます。３川とも下流は天井川となり、江戸時代には淀川との間に滞留する水を排水する水路が整備されました。源流から流末まで市内で完結する数少ない１級河川・芥川は、原盆地から服部谷へ流れでる途中、峡谷美で知られる景勝地・摂津峡を刻んでいます。

また、芥川上流域は、平成 29(2017)年に、大阪府で初めて河川水環境基準で最上位のＡＡ類型（ダブルエー※注）に指定されるなど、良好な水質の河川として知られています。

※注ＡＡ類型：良好な水質の水域として全国的に知られている高知県の四万十川などが指定されている。大阪府下では芥川上流域を含め３例のみ。

＜本市の地形的特徴＞



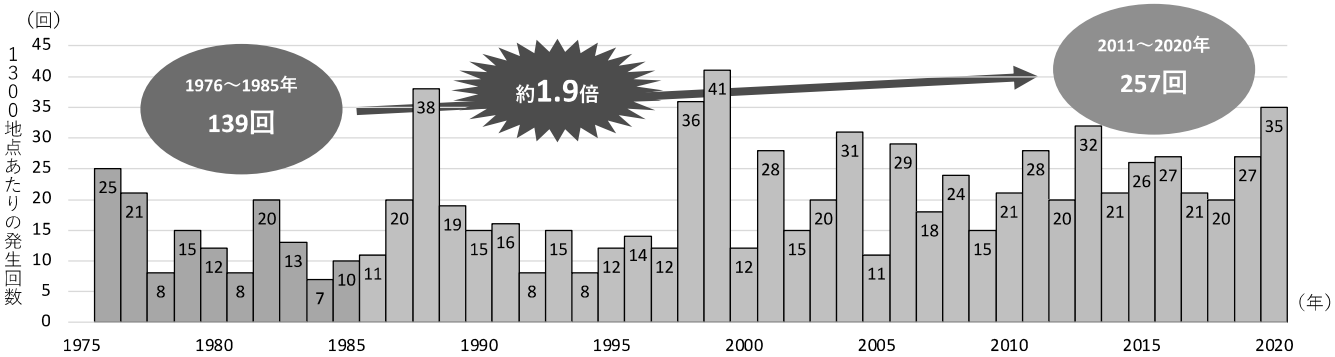
出典：高槻市景観基本計画（一部加筆）

⑶気候・近年の災害履歴

本市の気候は、全体としては温暖少雨の瀬戸内型気候に属しています。ただし北部山間と平野部では多少の地域差があり、山間部では冬季に路面が凍結する地域も見られます。

また、全国的に時間雨量 80mm を超える、いわゆるゲリラ豪雨といわれる雨の年間発生回数は増加傾向にあり、大規模な浸水被害が発生する恐れは高まっています。本市においても、近年の災害履歴をみると平成 24(2012)年には集中豪雨により床上浸水、道路冠水を含む被害が、平成 30(2018)年には大阪府北部地震により広範囲に及ぶ被害が生じた他、西日本豪雨と台風 21 号により北部山間地の大規模な倒木被害やがけ崩れ、道路冠水が生じました。さらに、南海トラフ巨大地震の 30 年以内の発生確率が 70～80%と予測されている中、地震や台風、豪雨といった大規模災害への警戒を高めていく必要があります。

＜全国の１時間降水量 80㎜ 以上の年間発生回数＞



※10 年あたり 3.0 回増加、1976 年から 2020 年のデータを使用

出典：気象庁ホームページデータを加工

⑷生態系

山地・丘陵地・沖積地と変化に富んだ市域には、2,000 種を超える植物があるといわれます。多様な地形と豊かな植生が多くの動物を育み、大阪府が選定したレッドリスト 2014 では、希少生物の生息状況を踏まえた生物多様性ホットスポットとして府内 55 か所、うち高槻市域から淀川鵜殿（うどの）、ポンポン山・本山寺、旧樫田、摂津峡、市南部の水田群の 5 か所が選定されています。

芥川や檜尾川の上流部には絶滅が危惧される動物などが生息しており、市ではこれらを高槻市緑地環境の保全及び緑化の推進に関する条例で保護動物に指定しています。このほか、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオも生息しています。

本市では、市内に残された緑を守るため、社寺林などを樹林保護地区に指定し、古木や大木で樹容が特に優れている樹木を保護樹木に指定するなど、貴重な緑地の保全も行っています。

また、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）では、このような動植物に関する資料を収集し、適切に保存して後世に伝えるなどの取組を行っています。

高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）

＜高槻市の保護動物＞

両　生　類	ヒダサンショウウオ、カスミサンショウウオ、モリアオガエル、カジカガエル
昆　虫　類	ホタル科全種、ムカシトンボ

＜高槻市の樹林保護地区・保護樹木＞

樹林保護地区	社寺林など 21 地区、約 13.8ha
保護樹木	クスノキなど 29 本

出典：第２次環境基本計画

２．社会的環境

⑴人口動態

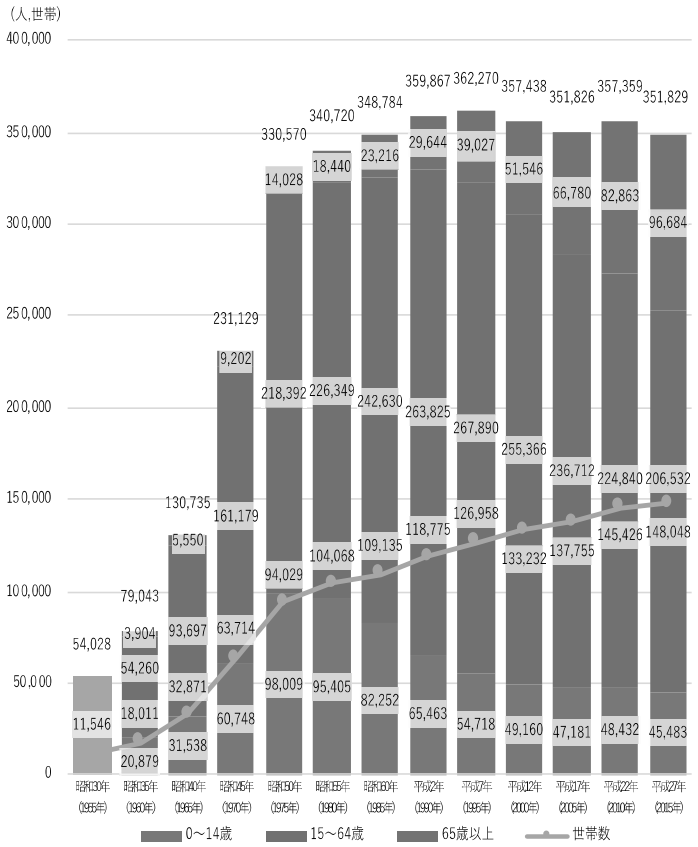
本市は、昭和 18(1943)年に市制を施行し、世帯数 6,796 世帯、人口 31,615 人で誕生しました。

昭和 40 年代に人口が急増し、昭和 50(1975)年には 33 万人に達しています。

その後、平成 7(1995)年頃まで増加は一貫して続き、一時期 36 万人を超えたものの、近年は横ばい状況から緩やかな減少傾向へと転じています。

0 歳から 14 歳までの年少人口は、昭和 50(1975)年には 10 万人近くに達しましたが、その後は減少し、平成 27(2015)年には約 45,000 人となっています。また、65 歳以上の老年人口は年々増加し、昭和 35(1960)年から平成 27(2015)年までの 55 年間で約 25 倍となっています。

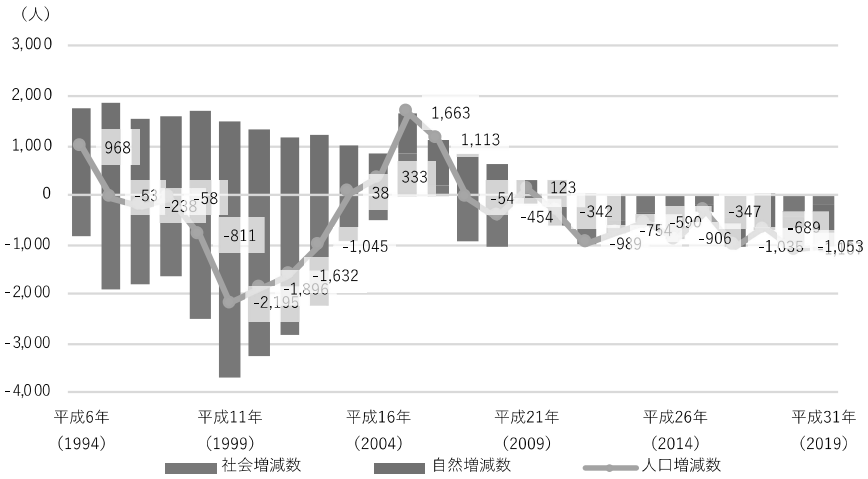
＜人口・世帯数と年齢構成（3 区分）の推移＞



出典：第２期高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略
＊データ：国勢調査(総数には年齢不詳分を含む)

また本市の人口動態の推移をみると、平成 22（2010）年までは、自然増加（出生数が死亡数を上回る状態）が続いていましたが、平成 23（2011）年以降は、自然減少（死亡数が出生数を上回る状態）かつ社会減少（転出数が転入数を上回る状態）となっています。

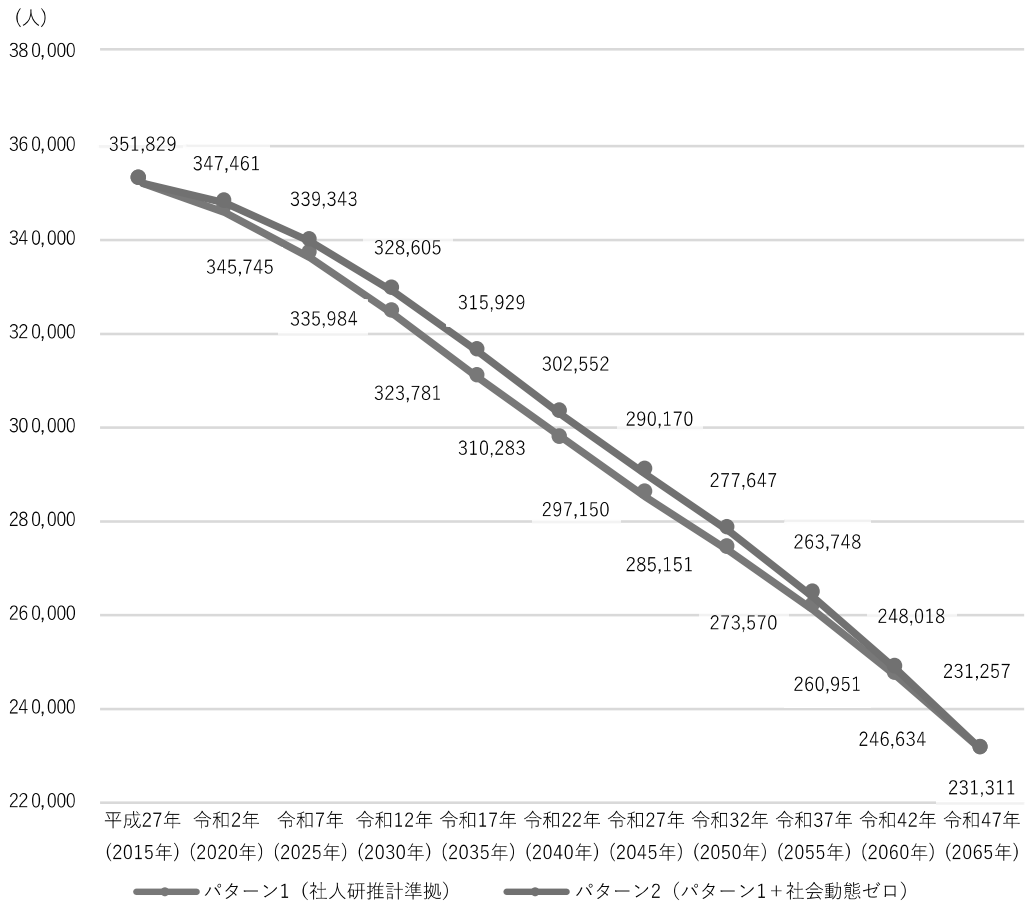
＜人口動態の推移＞



出典：総務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査
（平成 23(2011)年までは日本人のみ、平成 24(2012)年以降は外国人を含む）

国の「まち・ひと・しごと創生本部」が配付した将来人口推計用ワークシートを用いて算出した将来推計人口の推移のうち、国が例示している方法（パターン１）での推計をみると、本市の将来人口は令和 47(2065)年には、231,311 人に減少することとなります。

＜将来推計人口の推移＞



出典：第２期高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略

注：パターン１ 社人研の推計方法に準拠した推計
　　パターン２ 基本的な推計方法はパターン１と同じで、社会動態をゼロとした場合の推計

⑵産業

■商工業

本市は、典型的な住宅都市でありながら、工業都市としての一面を備えており、幹線道路沿道を中心に食品、電気機器、医薬品等の大規模な工場や研究所が立地しています。

また、JR 高槻駅・阪急高槻市駅周辺の中心市街地には、店舗、事業所などが集積し、特に飲食・サービス業については大阪府内でも有数の商業地域となっています。市内には多くの商業団体が存在し、共同施設の整備や集客イベントの実施などの活発な活動が見られます。

JR 高槻駅周辺の中心市街地

■農　業

令和 2(2020)年作物統計調査によると、本市の耕地面積は 586ha で、市面積の 5.6%です。耕地の内訳は田 550ha、畑 36ha で、それぞれ全耕地に占める割合は 93.9%と 6.1%です。大都市圏の農業としては野菜等を中心とする近郊農業ではなく、水稲中心の水田農業の姿が読み取れます。

令和 2(2020)年農林業センサスによると、本市の農家数は 1,213 戸であり、そのうち自給的農家が 779 戸で 64.2%を占めており、販売農家としては 35.8%の 434 戸です。

特産品は、トマト(樫田・三箇牧(さんがまき)地区)、シイタケ(樫田地区)、シロウリ(清水地区)、イチゴ(阿武野・清水地区)、花卉(かき)(芥川地区)、タケノコ(五領地区)、米(市全域)が知られています。

市域北部原周辺の農村風景

■林　業

平成 27(2015)年農林業センサスによると、本市の林野面積は 4,953ha で、所有形態別では国有林が 143ha、公有林が 67ha あり、95.8%にあたる 4,744ha が私有林です。

林種別森林面積は 4,627ha あり、市域の総面積に占める割合は約 44%で、そのうち樹林地が 4,428ha と、森林面積の 95.7%を占めています。樹林地の内訳は人工林が 2,428ha で 54.8%、天然林が 2,000ha で 45.2%、また竹林面積は 140ha となっています。

令和2(2020)年農林業センサスによると、保有山林面積規模別経営体数では、8 経営体の 87.5%にあたる 7 経営体が 10ha 未満であり、小規模林家が大半になっています。

市域北部樫田周辺の山林

■観　光

本市には、四季折々の風情が楽しめる「名勝・摂津峡」をはじめとした豊かな自然資源、安満遺跡、今城塚古墳など歴史資源のほか、三好長慶や高山右近など歴史上の人物に関わる資源、富田寺内町や西国街道などのまちなみ、農業や林業、工場、商店街などの産業関係の資源、さらには恒例行事となった高槻ジャズストリート（注１※）や高槻アート博覧会（注２※）、come come*はにコット（注３※）といった誘客イベントなど、様々な魅力的な文化資源を有しています。

また、平成 29(2017)年に「新名神高速道路」高槻 IC・JCT が供用開始され、各地へのアクセス時間が短縮した他、駅から徒歩圏内の広大な場所に、弥生時代の安満遺跡を保存・活用した「安満遺跡公園」が令和 3(2021)年に全面開園するなど、誘客ポテンシャルを高めるまちづくりを進めています。

さらに、高槻市・高槻市観光協会・高槻商工会議所による連携事業「オープンたかつき（注４※)」では、体験交流型観光プログラムを提供しており、観光資源の鑑賞だけではない、新しい観光スタイル創出を図っています。

オープンたかつきガイドブック

高槻ジャズストリート

高槻アート博覧会

come come*はにコット

注１※　高槻ジャズストリート…「高槻を、音楽あふれる楽しいまちにしよう」という思いから、市民ボランティアによる運営のもと、市内６０箇所以上の会場でジャズ演奏が繰り広げられる大規模な音楽イベントで、平成 11(1999)年から毎年ゴールデンウィークに開催されています。

注２※　高槻アート博覧会…「アートのまち高槻」を広く発信することで、商業の活性化、地域の魅力づくり、若手クリエイターの発掘・育成を目指すアートイベントで、市民ボランティアによる運営のもと、JR 高槻駅から阪急高槻市駅の間の商店街を中心に、複数箇所でライブイベントやワークショップなどを展開しています。平成 13(2001)年より毎年 11 月に開催されています。

注３※　come come*はにコット…今城塚古墳公園を舞台に、市民ボランティアやアーティスト、クリエイターにより開催されている「アートと古墳の祭典」で、毎年 11 月に開催されています。古代・古墳の文化資源とアート表現との融合から生まれた「古墳グッズ」、や「古墳フード」が人気を博するイベントです。

注４※　オープンたかつき…自然、歴史、グルメ、アートなど、さまざまな高槻の魅力をただ「見る」のではなく、地元の人と交流し「体験」することで新たな良さを発見する、体験交流型観光プログラムで、高槻市・高槻商工会議所・高槻市観光協会の連携により提供されています。市内の店舗や飲食店、サービス提供事業者等と連携した、多彩な体験交流型観光プログラムがあります。

■伝統産業

富田の酒造

富田の酒蔵

富田は、酒造に代表される商工業の町として知られています。酒造に適した良質な地元産のお米、富田台地の良質な伏流水、丹波・丹後からの農閑期の労働力など、昔から酒造りに必要な条件を備えていました。戦国時代の豪商・清水（紅屋）市郎右衛門が慶長 5(1600)年の関ヶ原の戦いの際、徳川家康に兵糧を運送し、その功によって富田での酒造の営業を保証されたと言われています。

江戸時代の初めには 24 軒もの造り酒屋があり、江戸にまで知られた銘酒の産地でした。江戸時代中期以降は、水運を利用して大消費地・江戸へ販路を開いた灘に押され富田地域全体での生産量は次第に縮小しました。しかし今も 2 軒の造り酒屋が富田の地酒を守り続けています。

寒天づくり

昭和 50 年代の寒天の乾燥風景

山間部の原・塚脇地区で生産されていた寒天は、100 年ほど前は国内屈指の生産量を誇り、海外にまで知られていました。高槻の寒天づくりは、天明 7～8(1787～8)年頃、市内城山出身の宮田半平が、伏見から製法を学んで郷里に持ち帰ったことから始まったとされます。

山間部で寒天づくりが盛んになったのは、原料のテングサを煮出してつくったトコロテンを寒気に晒し、凍結・乾燥を繰り返して寒天とするため、製造に適した冬の寒さや、テングサを煮るための薪や炭が豊富であること、原料の入手や製品の出荷に淀川の水運が利用できたといった気候や地勢、気候等の条件が整っていたことによると考えられます。淀川の河港・前島と山間を結ぶ街道は「京坂越え」と呼ばれ、原には輸送を担った牛をねぎらう牛地蔵が祀られています。寒天製造は気候の変化や担い手の高齢化で衰退しましたが、市内最北の樫田では、現在もその伝統が受け継がれています。

鵜殿のヨシ

市内東部の道鵜・上牧（かんまき）地区の淀川河川敷には、75ha にも及ぶ広大な「鵜殿のヨシ原」が広がっています。鵜殿のヨシは、高さ 3m に達し太く弾力性に富んでおり、雅楽で用いられる楽器・篳篥（ひちりき）の吹き口として古来珍重されていました。江戸時代後期の『摂津名所図会』には貢物として献上されているとあり、現在も宮内庁や伊勢神宮では鵜殿のヨシが用いられています。

もっとも、ヨシの最大の用途はヨシズ製造で、宇治の茶園や山間部の寒天製造業で盛んに使われましたが、寒天製造業の縮小とともにヨシズ製造も規模が小さくなっていったといいます。

現在鵜殿では、雑草などを駆除して品質のよいヨシを育てるため、毎年 2 月に地元の人々により「鵜殿のヨシ原焼き」が行われています。また国は、上流のダム建設などで水位が下がり生育が振るわなかった状況を改善するため、ヨシ原に水路を掘削してヨシの育成を図るプロジェクトを進めています。

⑶交通

近代になって鉄道や道路が発達するまで、物資輸送は水運が主流でした。本市の南を流れる淀川は、古来京の都と西国を結ぶ広域交流の要であり、市域の歴史文化を育んだ「母なる川」といっても過言ではありません。

陸上交通に関しては、奈良時代以降、平城京・平安京と九州の大宰府を結ぶ山陽道が平野部を東西に貫き、多くの人々が行き交いました。のちに山陽道の後身は西国街道と呼ばれ、江戸時代には脇街道「山崎通（やまざきみち）」として芥川宿が置かれるなど、参勤交代の大名や行き交う旅人らで賑わいました。一方淀川では、京都の伏見と大坂の八軒家の間を往復した旅客専用船・三十石船や多数の荷船が行き交い、天下の台所・大坂を支えました。

近代以降は、明治 9（1876）年に官営鉄道、大正末(1926)年に民営電鉄が敷設され、現代の京阪神間を結ぶ JR 東海道本線及び阪急京都線の基となりました。

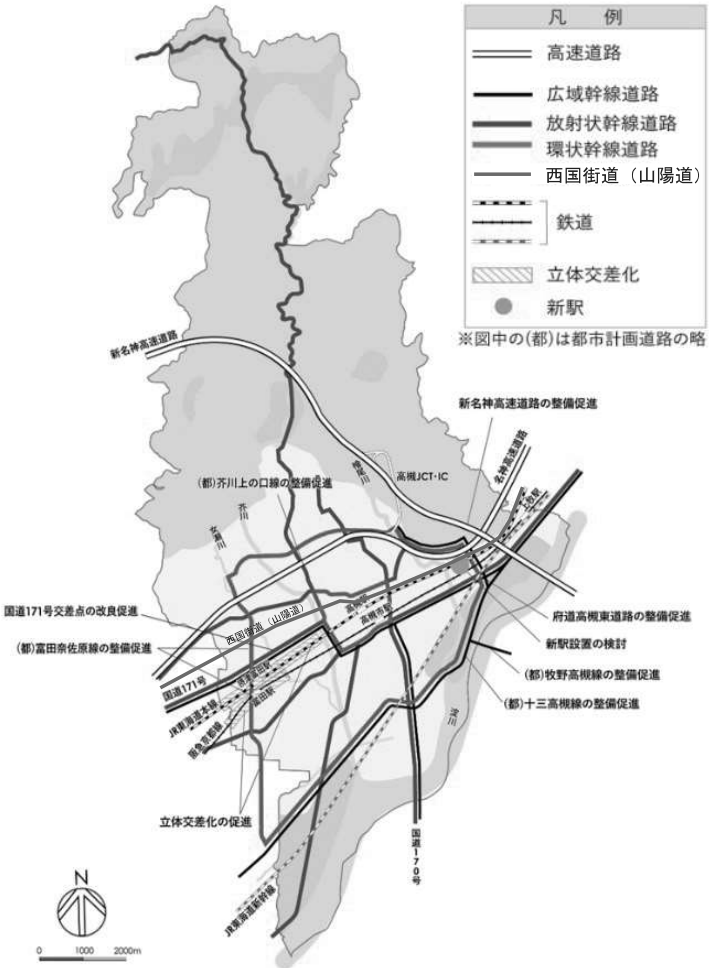
現在、JR 高槻駅には新快速や特急が、阪急高槻市駅には特急が停車するなど、大阪や京都への利便性が高くなっています。

道路網は市域を東西に貫く国道 171 号、本市起点に南へ延びる 170 号を軸に整備が進み、平成 29(2017)年には新名神自動車道路が供用開始され、高槻 IC、高槻 JCT で名神高速道路ともつながりました。

また、本市の「市バス」は、市内に路線網を広げる、大阪府下で唯一の公営バスです。市営バスは鉄道駅から市内各地域への放射状ネットワークを形成し、市民の足として親しまれています。

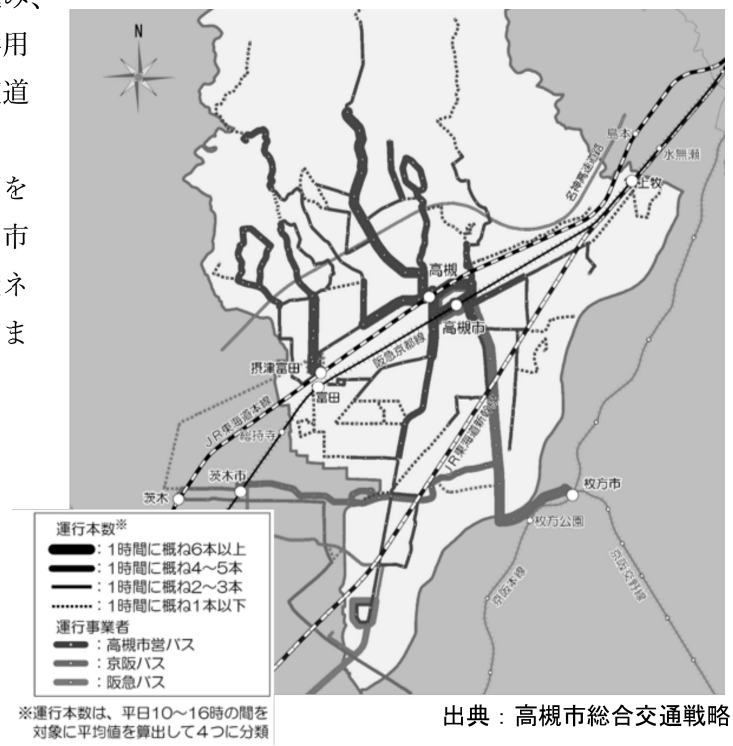
高槻市営バス

＜交通網図＞



出典：高槻市都市マスタープラン（一部加筆）

＜高槻市のバスネットワーク＞



※運行本数は、平日10～16時の間を対象に平均値を算出して4つに分類

出典：高槻市総合交通戦略

⑷景観

本市の地理的特徴や歴史的経緯等を踏まえ、本市の景観政策の基本方向を定めた高槻市景観基本計画においては、本市の景観の特徴を形づくる景観類型として、「自然的景観」、「歴史的景観」、「市街地景観」の 3 つを位置付けています。

「自然的景観」は、北部の山地から南部の淀川低地に至る北高南低の地勢にあって、芥川等の河川が盆地や峡谷、扇状地等多様な地形を刻み、森林、渓流、里山と集落等、自然と人が織りなす多彩な景観により形成されています。

また、「歴史的景観」は、長い歴史を物語る数々の遺跡や今城塚古墳をはじめとする古墳、芥川宿等の西国街道沿いの集落、旧高槻城下町、寺内町・在郷町であった富田等に残された古い町並み等、重層した景観を形成しています。

さらに、「市街地景観」は、35 万人が暮らす中核市として、市街地を中心に各種の都市施設の維持・整備が進められており、新たに形成されつつあります。

＜本市の景観類型＞

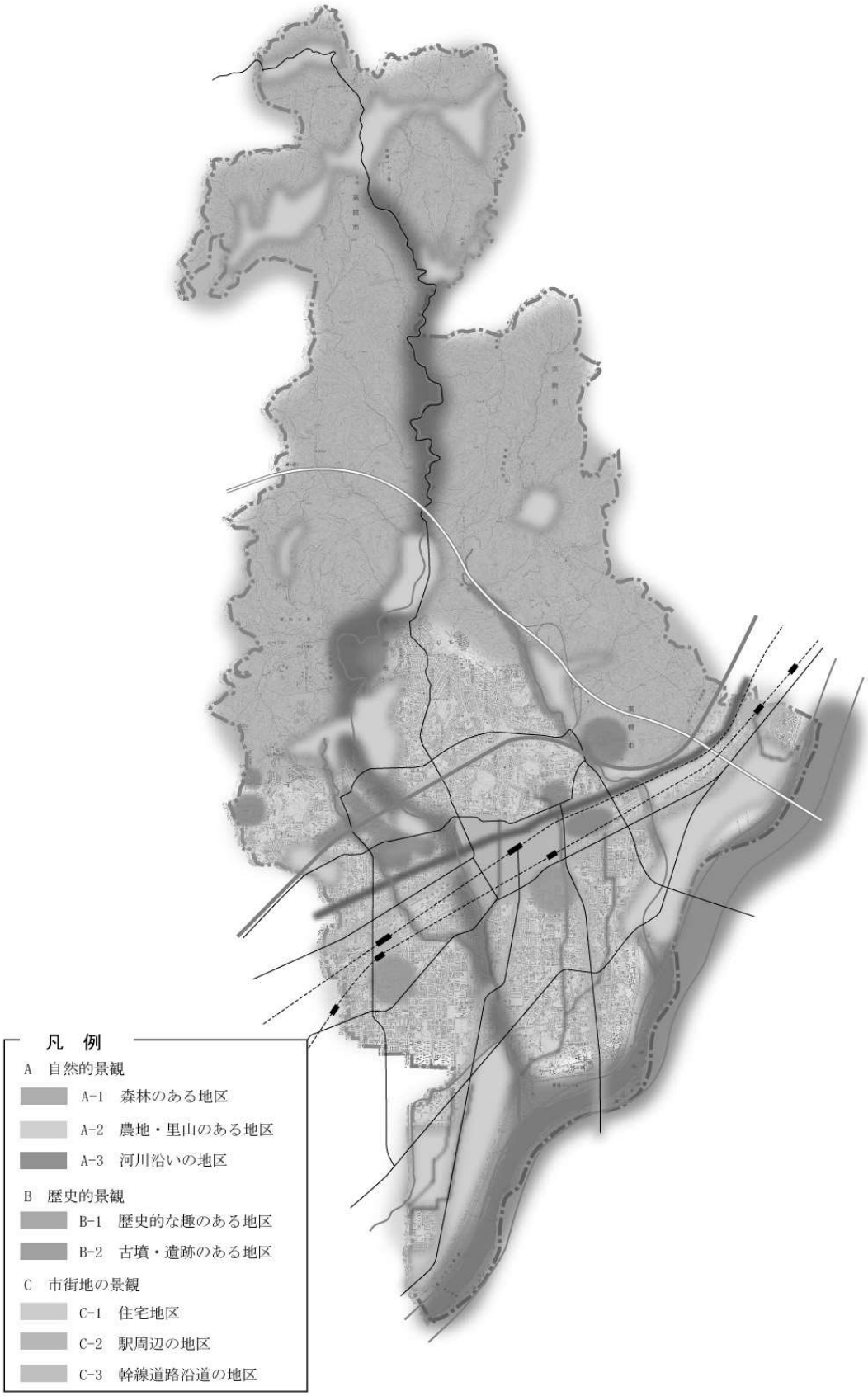
A 自然的景観	A-1 森林のある地区	北摂山系
	A-2 農地・里山のある地区	丘陵部に点在する盆地 山間部の盆地 淀川低地の農地
	A-3 河川沿いの地区	淀川・芥川・桧尾川・女瀬川 その他主要水路
B 歴史的景観	B-1 歴史的な趣のある地区	西国街道沿いの地域 富田地域、高槻城跡周辺等
	B-2 古墳・遺跡のある地区	今城塚古墳周辺、阿武山古墳周辺等
C 市街地の景観	C-1 住宅地区	－
	C-2 駅周辺の地区	JR、阪急駅周辺
	C-3 幹線道路沿道の地区	国道 171 号、170 号 府道大阪高槻線

出典：高槻市景観基本計画

西国街道と芥川宿の旧家

富田に所在する高槻まちかど遺産・出世地蔵

＜本市の景観類型＞


凡　例
A　自然的景観
A-1　森林のある地区
A-2　農地・里山のある地区
A-3　河川沿いの地区
B　歴史的景観
B-1　歴史的な趣のある地区
B-2　古墳・遺跡のある地区
C　市街地の景観
C-1　住宅地区
C-2　駅周辺の地区
C-3　幹線道路沿道の地区

⑸歴史博物館施設・史跡公園等

＜歴史博物館施設・史跡公園と主な文化資源・文化財の位置＞

●しろあと歴史館

しろあと歴史館

しろあと歴史館は、江戸時代の高槻城三の丸跡の一画に建つ歴史博物館（登録博物館）です。

戦国時代以降の文化財を中心に、三好長慶や高山右近ゆかりの史料を含む古文書約 10 万点、武具・甲冑コレクション約 200 点、伏見人形他の郷土玩具コレクション約 3 万点等の資料を収蔵し、調査研究や展示を通じて市の歴史と文化の情報発信に努めています。

戦国・江戸時代の高槻を、資料や映像、模型などで紹介するとともに、市内に眠る文化財の収集や保存、調査研究も行い、それらの成果は特別展や企画展等で公開しています。また、学芸員による各種の歴史講座のほか、気軽に参加できる歴史イベントや、子どもの日などの季節行事にちなんだ催しを実施しています。常設展示室では、ボランティアの文化財スタッフが展示ガイドを行っています。

●歴史民俗資料館・高槻城公園

本市では、高槻城跡の一画を昭和 31(1956)年に都市公園とし、堀を模した石垣と池や、白壁と本瓦葺きが印象的な歴史民俗資料館を開設しています。同館は、城下の紺屋町にあった商家・旧笹井家住宅（市指定）を移築復元したもので、ふるさとの暮らしや生業を語る生活用具、農具・漁具などの民俗文化財を保存、展示しています。また、令和 3 (2021)年には「城跡公園」の名称を「高槻城公園」に変更し、二の丸跡で建設中の芸術文化劇場との一体的な整備を図っていきます。

歴史民俗資料館

高槻城公園

●いましろ 大王の杜（今城塚古墳公園・今城塚古代歴史館）

今城塚古墳公園では、10 年にわたる発掘調査の成果にもとづいて整備を行い、1500 年前の大王墓の雄大さが体感できる緑豊かな歴史公園として、平成 23(2011)年に今城塚古代歴史館を併設する「いましろ 大王の杜」として開園しました。

今城塚古墳公園の埴輪祭祀場

二重の濠を復元的に整備し、巨大前方後円墳の形を再現しています。また、この古墳最大の特徴であり、他に類を見ない埴輪祭祀場では、家･大刀･盾･人物・動物など約 190 点の形象埴輪で完成当時の姿を再現しています。古墳北側には、埴輪祭祀場を一望する「はにわバルコニー」や全体模型を設置しています。近年では、埴輪をテーマにした市民による大規模イベント―come come*はにコット―等も開催され、古墳の活用が進んでいます。

隣接する今城塚古代歴史館は、発掘調査成果を軸に、今城塚古

墳と古墳時代の歴史文化を紹介する博物館（登録博物館）です。常設展示室では、三島地域の古墳時代をテーマに、古墳づくりのさまざまな工夫を実物大のジオラマ模型や映像を用いて解説しています。

今城塚古代歴史館

また、継続して今城塚古墳の調査・研究を進める拠点であり、特別展・企画展等でその成果を公表しています。学芸員による各種の歴史講座のほか、ハニワづくりや勾玉づくりが気軽に楽しめる体験教室を常設し、ボランティアの文化財スタッフがガイドを行うなど、市民とコラボレーションした歴史体験と学習の場です。一角に設けた観光情報コーナーでは、地元産品の販売や市内のさまざまな情報を発信しています。

●埋蔵文化財調査センター

今城塚古墳をはじめ、安満遺跡、安満宮山古墳、嶋上郡衙跡（しまがみぐんがあと）など市内 150 か所以上の史跡・遺跡を発掘調査し、収蔵・整理・研究する施設として昭和 50(1975)年に開設しました。

埋蔵文化財調査センター

館内には出土遺物の収蔵室や整理室、研究室などがあり、前庭には弥生時代の復元竪穴住居や塚脇古墳群の横穴式石室などを移設保存しています。

●新池ハニワ工場公園

今城塚古墳に埴輪を供給した日本最大のハニワ工場・新池遺跡を保存・整備し、楽しく学べる史跡公園として、平成 7(1995)年に開園しました。窯や工房を復元した「5 世紀のハニワ村」、マンガ陶板による楽しい解説や復元ハニワ、発掘調査で検出した窯が見学できる「ハニワ工場館」で、古墳時代やハニワづくりの様子が学べます。

新池ハニワ工場公園

●安満遺跡公園

安満遺跡は、約 2500 年前に近畿地方でもいち早く米作りが始まった、弥生時代の環濠集落跡です。京都大学附属農場の開設工事で発見されて以来 90 年、農場の存在で開発を免れ、遺跡が良好に保存されてきました。居住域・生産域・墓域が確認されている全国的にも稀な弥生遺跡です。

安満遺跡公園

農場移転に伴い、跡地一帯に広がる国宝級の歴史資産・安満遺跡を保存・活用し、防災機能を備えた緑豊かな安満遺跡公園の整備を進め、令和 3(2021)年 3 月に全面開園しました。

この公園は、「高槻市のシンボルとなる市民共有の公園を市民とともに育てつづける」を整備理念に、時代やニーズに合わせて育てていく公園として、民間のノウハウやアイデアを活かした管理運営を行います。そして公園を舞台に、市民活動グループ「安満人倶楽部」が古代米の栽培をはじめ魅力的なイベントやプログラムの提供などの様々な活動を展開しています。

３．歴史的環境

⑴原始・古代

●旧石器時代（およそ２万年前～1 万５千年前）

旧石器時代の歴史を伝える最古の出土品は、本市西部に位置する約２万年前のキャンプ地（狩猟・採集生活の生活跡）・郡家今城（ぐんぱいましろ）遺跡の石器です。獲物を解体して調理し、次の狩りのための石器を作り、道具の手入れをした跡が見つかっています。ナイフ形石器や石器の素材、チップ（石器を作る際に生じたもの）や石焼き調理に使い砕けた石も出土しています（府指定文化財）。

この他、津之江南遺跡や、塚原遺跡など、主に山麓から台地上に遺跡が分布します。

旧石器（郡家今城遺跡）

●縄文時代（およそ１万５千年前～2500 年前）

中心市街地の近くに位置する芥川遺跡が、縄文時代の人々の生活や活動の様子を伝えています。

芥川遺跡では、墓や土壙、炭化したドングリや焼土、土器、石皿や磨石などの生活用具が出土しています。また、発掘された縄文土器からは関東地方や山陰地方との交流が確認されています。

縄文土器（芥川遺跡）

●弥生時代（およそ 2500 年前～3 世紀中頃）

弥生時代の生活や人々の活動を、本市東部の史跡安満（あま）遺跡から知ることができます。居住地を濠で囲む環濠集落で、近畿地方でもいち早く紀元前５世紀頃に稲作技術を携えた人々が到来し水稲耕作が始まりました。南に堰や用水路を備えた水田が広がり、東西に墓地が営まれていました。多数の弥生土器、石器とともに木製の農工具などが出土しています。珍しい漆塗りのカンザシとクシは、在地の縄文人と新来の弥生人の交流の証です。

小区画水田（安満遺跡）

中心市街地を見下ろす天神山遺跡は、弥生時代中期に出現した丘陵上の集落で、銅鐸を用いたまつりが行われていました。古曽部・芝谷（こそべ・しばたに）遺跡は、弥生時代後期の最大級の高地性集落で、標高 80～100ｍの丘陵頂部を延長 2,000ｍ超の大環濠で囲んでいました。100 棟を超える住居が見つかり、鉄器や砥石が出土し、近畿地方における鉄器の普及と集落間の争いなどの緊張状態を伝えています。

左：銅鐸（天神山遺跡）
右：竪穴住居群（古曽部・芝谷遺跡）

●古墳時代（およそ 3 世紀中頃～7 世紀後半）

古墳時代には、高槻市を中心とした三島地区に約 700 基の古墳が築かれ、「三島古墳群」と総称しています。本市では、市域中央部を流れる芥川西岸の丘陵から台地にかけて、大小 450 基を越える古墳が営まれ、古墳時代約 400 年間を通じて途切れることなく古墳がつくられました。この三島地域の勢力がヤマトの王権と安定した関係を結んでいたことを示しています。

安満宮山古墳の墓壙

最古の安満宮山古墳は 3 世紀中頃の築造で、ふもとの安満ムラのリーダーが葬られました。中国･魏の皇帝から倭国女王卑弥呼に贈られた「銅鏡百面」の一部とみられる「青龍三年」(235 年)銘の方格規矩鏡を含む銅鏡 5 面、鉄刀・ガラス玉など(重要文化財)が出土しています。

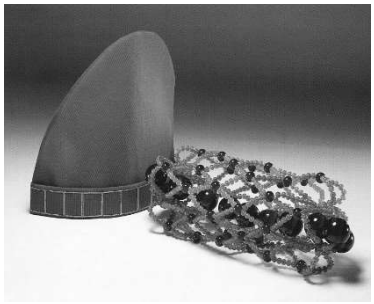
闘鶏山古墳

3 世紀後半以降、三島地域の主導権は安満から芥川西岸の郡家川西ムラに移り、ムラを見下ろす丘の上に歴代の王墓、岡本山･弁天山･弁天山 C１号・郡家車塚といった前方後円墳が築造されました。4 世紀前半築造の史跡闘鶏山古墳は、この三島王家傍系の王墓で、未盗掘の石槨２基をもつ稀有な古墳です。

5 世紀中頃になると、富田台地上に巨大な前方後円墳・太田茶臼山古墳（茨木市、宮内庁管理）が出現します。ヤマト王権が富田台地の開拓にかかわり、地域勢力が再編された可能性があります。この巨大古墳築造を契機に、専用の埴輪工場（史跡新池埴輪製作遺跡）が設けられ、太田茶臼山古墳や史跡今城塚古墳などの埴輪を生産しました。

人物埴輪（今城塚古墳）

史跡今城塚古墳は淀川流域最大級の前方後円墳で、10 年間にわたって大王墓初の発掘調査を行い、精巧な形象埴輪を整然と配置した埴輪祭祀場や横穴式石室の採用が確認され、遠く九州から運ばれた阿蘇ピンク石の石棺などが出土しました。埴輪窯の年代測定から 6 世紀前半の築造であることが確定し、531 年に没した継体大王が葬られたと考えられています。



冠帽と玉枕（阿武山古墳復元品）

6 世紀中頃以降、塚原・塚脇・安満山などの丘陵部に小さな円墳が群集する、群集墳が営まれました。7 世紀後半築造の史跡阿武山古墳では、漆喰を塗り込めた墓室内に未盗掘の夾紵棺が遺されており、棺内から類例のない多量の金糸を用いた冠帽や玉枕が発見されました。古墳の年代や内容から中臣(藤原)鎌足の墓と推定されています。

●奈良・平安時代（およそ 8 世紀～12 世紀）

奈良・平安時代、市域は摂津国嶋上郡にあたり、山陽道(後の西国街道)沿いに郡役所が設けられていました。芥川西岸の史跡嶋上郡衙跡附寺跡であり、郡務を司る庁院や税を収める正倉、郡寺等の施設が確認されています。発掘調査では、石組の井戸から嶋上郡を意味する「上郡」と墨書された土器が出土し、郡衙の存在を裏付けました。

「上郡」墨書土器（嶋上郡衙跡）

また周辺では、山陽道が発掘調査で確認され、7 世紀末～8 世紀前半

に幅 10～12mで敷設され、9 世紀中頃～後半に幅 5～6mに作り替えられて 11 世紀中頃まで存続したことが明らかになりました。

本市北部の山間部では、9 世紀以降本山寺・神峯山寺・安岡寺・霊山寺・金龍寺といった山岳寺院が成立し、都の影響を受けた平安時代の優美な仏像が伝わります。

他にも、中心市街地に近い古曽部では、平安歌人の伊勢や能因法師の足跡が伝承され、また三島江や玉川の里など市内各所に歌枕の地があることから、都の文化が本市へと伝わっていたことがわかります。

市史跡・伝能因法師墳（古曽部）

神峯山寺の阿弥陀如来坐像
（重要文化財）

⑵中 世

●鎌倉・南北朝・室町・安土桃山時代（およそ 13～16 世紀）

鎌倉時代、西国と畿内を結ぶ大動脈・西国街道沿いの芥川で、町場である宿が形成され、近隣では鎌倉幕府に仕える御家人（武士）の真上氏が活動します。やがて南北朝時代になると、真上氏を吸収した芥川氏が芥川宿を拠点に、市域を越えた北摂一帯で勢力を培いました。また、室町時代には今に続く村が成立し、成合春日神社などには人々が信仰した神社と付属する神宮寺に関する文化財が伝わっています。

大般若経（成合春日神社・市指定）

戦国時代になると、芥川中流の三好山に、室町幕府管領で摂津・丹波国守護をつとめた細川京兆家が芥川山城を築城し、拠点として利用します。天文 22(1553)年には畿内を実力で支配した天下人三好長慶が入城し、高槻出身の松永久秀らが権力を支えました。のちの永禄 11(1568)年には、足利義昭と織田信長が上洛に先駆けて同城に入城し、新たな天下支配の枠組みを示しています。

塼列建物跡（芥川山城跡）

中心市街地の高槻では、芥川山城に先立って入江氏が高槻城を築いていました。和田惟政を経て、元亀 4(1573)年頃、その城主に高山右近が就きました。右近はローマカトリック教会が福者とした世界的に有名なキリシタンです。当時の高槻では教会や学校が建設され、領民の多くがキリシタンになったと伝わります。発掘調査では、教会付属のキリシタン墓地が見つかり、フロイス『日本史』の記述を裏付けるロザリオが出土しています。この頃から、現在の市街地の核となる城下という町場が本格的に形成されました。

ロザリオ（キリシタン墓地）

本市西部の富田では、蓮如の布教を契機に浄土真宗が広まって寺内町が成立し、町場が発展しました。普門寺では、永禄 11(1568)年に足利義栄が第 14 代室町幕府将軍に就任しています。また天正 10(1582)年の山崎合戦の直前、羽柴(豊臣)秀吉は富田に逗留し、芥川宿近くの天神の馬場に陣を置いて、西国街道から東へと軍勢を進めました。

⑶近 世

●江戸時代（およそ 17 世紀～1867 年）

江戸時代の本市は、城下町として発展しました。江戸幕府が京坂間の要衝として高槻城を大改修し、慶安２(1649)年に永井直清が入城して以降、譜代大名の永井家が明治維新まで城主を務めました。幕末には著名な漢詩人藤井竹外が活躍し、三の丸の武家屋敷跡では武家が興じた中将棋の駒が出土しています。

寺内町に始まった富田は、酒造で知られる在郷町として栄えました。富裕な町人が豊かな文化を育み、中国僧の隠元が宇治に黄檗宗萬福寺を開くまで、一時滞在しました。

流通の発達に伴い、西国街道は五街道に次ぐ脇街道・山崎通となって、芥川宿には参勤交代の大名が利用する本陣が設けられています。また、街道沿いで歌人伊勢や能因ゆかりの古曽部では、江戸時代の終わりに古曽部焼という地方窯が開かれ、日用食器や花器・茶器を焼き、京坂間の文人茶人に好まれたといいます。

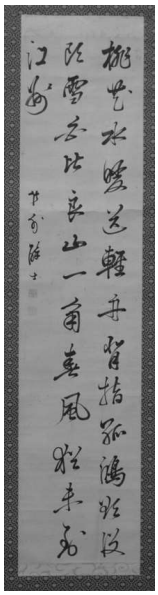
西国街道名所絵図（部分・個人蔵）

淀川では舟運が益々盛んとなり、三十石船が京都と大坂を結び、高槻は煮売茶船「くらわんか舟」の発祥地となりました。淀川沿いの低地では悪水を排水するための水路が開削され、高槻藩では天井川の芥川を潜る番田井路の工事を承応２(1653)年に完成させています。

市域における流通の背景には、村々を舞台とした人々の生業がありました。江戸時代の村々では、広く領主支配の一部を村人らが請け負うことが行われるようになりました。村にいる庄屋が村人の戸籍や年貢の徴収、触れの通達、争いごとの届出などに責任を持ち、村人の生活に深く関わりました。市域には、この庄屋が残した文書が伝存し、また村々の古文書は年貢米の管理や輸送、農業用水の確保、雨乞いの実施、寺社への届出など、様々な人々の暮らしを伝えています。村々では産業が発達し、西国街道沿いの瓦や北部山間の炭薪に加え、山間部の原の寒天や服部煙草は品質の高さで知られます。これらは淀川の浜から津出しされ、寒天は海外へも輸出されたことが知られています。

富田の氏神・三輪神社

古曽部焼三島写茶碗
（しろあと歴史館蔵）


藤井竹外書
「花朝下澱江」七言絶句
（しろあと歴史館蔵）

⑷近 代

●明治～昭和時代

本市の中心市街地は、明治 22(1889)年の町村制施行で島上郡高槻村となり、明治 31(1898)年に高槻町（人口約 3,000 人）、昭和 6(1931)年に 4 町村と合併し、昭和 18(1943)年には府内 9 番目となる市制が施行され、高槻市が誕生しました。この近代以降の本市の発展を今に伝えるものとしては、鉄道や土木遺構、近代建築等があげられます。

鉄道については、現 JR 高槻駅が明治 9(1876)年に開業し、翌年には京都大阪間の鉄道が開通しました。また、市域南部では明治 29(1896)年、外国人デ・レーケらの手で、たびたび洪水をもたらしていた淀川の改修工事が着工し、明治 43(1910)年に完成しました。しかし、大正 6(1917)年には淀川の堤防が決壊した「大塚切れ」が起こっています。

陸軍工兵隊営門跡

かつての旧京都大学高槻農場
（現在は安満遺跡公園）

中心市街地では、明治 42(1909)年に高槻城跡へ陸軍工兵隊が誘致されました。昭和 3(1928)年には現阪急高槻市駅が開業、周辺での住宅開発も進みました。昭和 3(1928)年に京都大学農場、昭和 5(1930)年に大阪高等医学専門学校（現：大阪医科薬科大学）が移転。その後、平安女学院大学、関西大学、大阪薬科大学（現：大阪医科薬科大学）が進出し、高等教育機関が多く立地することになりました。

昭和 5(1930)年の高槻町芥川町観光パノラマ地図（しろあと歴史館蔵）